社内情報システムも自社開発

創業者の渡辺福徳社長が根っからの技術者だからなのだろう。ダイナックスはインターネットを利用した社内情報システムまで自社開発している。

独ＳＡＰなどのソフトウエアメーカーが開発・供給している、いわゆるＥＲＰ（統合基幹業務システム）と同様の発想に基づくシステムで、同社では「ＴＷＳ（トータル・ウェブ・サーバー・フォー・スモールオフィス）」という名称で2000年頃に開発に着手、02年頃から実用化した。

子会社通じ外販も

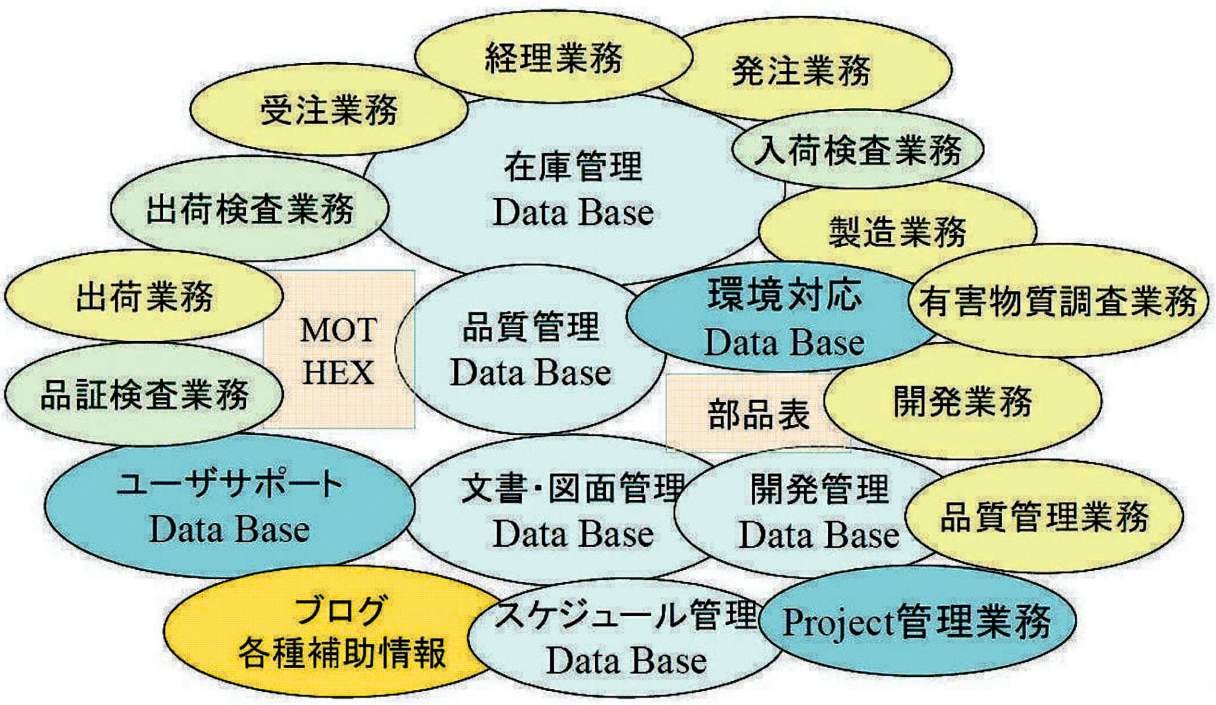
社内での使用にとどまらず、子会社の「イーダイナックス」（東京都府中市）を通じて、外販にも積極的に乗り出しており、日々、必要に応じてバージョンアップしているという。

「ＴＷＳ」は、柔軟かつダイナミックなデータベースを構築したことにより、「在庫管理」「受発注管理」「品質管理」「プロジェクト管理」「有害物質管理」など各種の業務管理システムを有機的に連携させて運用できる。各種文書はＰＤＦで自動作成されるなど、業務担当者の労力軽減に役立ち、経営管理者はリアルタイムで業務を把握できる。

例えば、経理情報は、一般的に広く使われている会計システム「弥生」にエクスポートできる仕組みで、決算業務がスムーズに行える。煩雑になりがちな技術情報（カタログ、検査データ、マニュアルなど）はデータベース管理されているので、情報の錯綜（さくそう）を最小限に抑えられる。

欧州連合（ＥＵ）指令のＲｏＨＳ（特定電子・電気機器の有害物質使用制限）など環境保全絡みの詳細情報も一元管理できる。渡辺社長は「給与以外の情報は社員なら誰でも閲覧できるので、各種情報の共有化も進む」と指摘。社内業務の効率化のみならず、同社の有力商品となる可能性を秘めている。

ＴＷＳの業務と関連データベースのイメージ



各種業務で入力されたデータは、ただちに他のすべての業務で確認・利用することができ、有機的運営が可能になる

独自技術 展示会で初披露

ダイナックスは11～13日に、東京・有明の東京ビッグサイトで開かれたメカトロニクス制御などの技術展「テクノフロンティア2012」に出展した。

ＦＡ（ファクトリーオートメーション）パソコンを不要にした画像処理アライメントコントローラで、タッチパネルを10㌅に拡大した「ＳＶＣ10」を初めて展示会で披露したほか、スカラ型ロボット、ＡＣサーボ一体型コントローラ、ドライバなどを展示。初日から多くの来場者がダイナックスのブースを訪れ、渡辺福徳社長も製品や技術の説明に追われた。

中でも、地味な存在ながら関心を示す人が多い製品がロボットや自動機械を操作するのに使う「ティーチング・ペンダント」と呼ばれる商品群だ。米ロボット安全規格「ＡＮＳＩ／ＲＩＡ15.06」に準拠した３ポジションスイッチのターミナルなどで定評がある。

展示会では、独自開発のカスタムＣＰＵやＡＳＩＣを搭載することでコントローラを小型化できるので、ロボットターミナルやタッチターミナルとモーションコントローラを一体化させることも可能だという説明に、とりわけ関心が集まっていた。

技術展「テクノフロンティア２０１２」に出展したダイナックスのブース

モーションコントローラとターミナルを一体化することも可能だ